

網膜症との闘い①

5年前の夏。輸入住宅販売会社を経営する岐阜県中津川市の小栗陽三さん(59)は、名古屋市内のオフィスで、住宅のカタログを見ていた。ふと窓の外の白いビルに目を移した時だ。突然、右目の視野に青紫のドーナツ状のものが現れた。中央部分にしか、風景が見えなかった。

「目がつぶれる」

恐怖に襲われ、すぐにかかりつけの北田内科クリニック(岐阜県岐阜市)の北田雅久院長に電話した。

32歳のとき、糖尿病と言われた。関連本を読みあさり、放置すれば失明したり足を切ったりすることもあると知った。だが若くて体力もあり、自覚症状もない。ケーキやまんじゅうも大好き。血糖を下げる薬は飲んでいたが、高血糖を指摘されるのを恐れて、通院は途絶えがちだった。代わりに「糖尿病に効く」といわれるものは、民間療法も健康食品も、何でも試した。

54歳のとき、胃の検査で訪

右目 真ん中しか見えない

れた総合病院に、糖尿病のため入院。「網膜症が進み、出血がみられる」と言われ、レーザー治療を勧められたが、「ちゃんと見えとるから」と、逃げるように退院した。そのころ、自社で扱う住宅を世話した縁で糖尿病専門医の北田さんと知り合い、通院を始めた。血糖値は242、HbA1cは11.0%。糖尿病の診断は、健康な人の倍ほどであった。眼科受診を促されたが、仕事優先で、先延ばしした。視野の異変は、その直後だった。

「出血が広がってる。すぐ大きい病院へ」。小栗さんの眼底写真を撮った北田さんは、愛知県内にある大学病院あてに紹介状を書いた。

長年続いた高血糖で網膜の細かい血管が傷み、栄養や酸素が届かなくなると、機能しない血管を補う「新生血管」が網膜に多数出現する。糖尿病性網膜症の重症段階だ。この血管はもろくて出血しやすいが、自覚症状がないことも多い。小栗さんの出血は、視力の要に及んでいた。

大学病院ではまず、新生血管の増殖と新たな出血を防ぐため、レーザー光を網膜にあてて焼き固める「光凝固術」をされると言われた。

糖尿病



陽三さんはこの窓辺にいた＝名古屋市で